

---

# 死の森-Another Style-

すとむみずみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死の森 - Another Style -

### 【Nコード】

N3382R

### 【作者名】

すとむみずみ

### 【あらすじ】

奇妙な事件に巻き込まれていく……。

”死の森”長編バージョン。ストーリーが若干変わっています。

(前書き)

どうぞ。

すとおみみずみです。

よろしくお願ひします。

暗く、寒い森だ。空を覗けば絵の具を零したかのように漆黒に染められ、わずかな月の明かりでさえも雲が拒むように流れている。それはまるで、この森の意思のようでもあった。

その森の深い深い場所に、男は佇んでいた。寒さを露骨に主張するように全身を深緑のローブで覆っている。もちろん男に気付く者もない。というより、男以外に人影がないのだ。無論、誰かがいたとしても、周りと完全に同化した男を認識するのは簡単なことじゃない。

切株に腰を下ろす男の横には、何か山積みになっている。烏の山だ。しかし息をするものも鳴くものもなく、ひたすら黙り込んでいた。

漂う腐臭に顔をしかめながら、それでも男はその場所を動かなかった。まるで自分はここに生まれここで死にゆくとしても言うように、何も言わずにただ空の黒を見つめていた。

メディアが大きく取り挙げてからは、町中が恐怖に、そして一部の人間の好奇に包まれた。ただでさえ神が住むとされ、近づくことがタブーとされている森で、明らかに自然死とは判別できない死鳥の山。古くからこの森を知る老人たちは、何かの祟りだと騒ぎ出したが、若い世代はまるで相手にしなかった。

一人の少年を除いては。好奇心に目を輝かせ、彼の友人を立て続けに三日も困らせている彼は、悪びれもせずにも同じことを繰り返す。

「絶対祟りだって！ なんもおかしいところなのに、烏の死骸が山積みだぜ」

「祟りなんてあるわけないだろ」

「じゃあ、どう説明すんだよ。何でいきなり森の鳥が一羽残らず死  
んじまったんだ？」

「もう………いいだろ。関わるなよ。痛い目みるぞ。………じゃあ  
な」

友人の昨日までと違う態度に、少年は困惑した。強引に話を打ち  
切る点は同じだが、それでもいいようなない違和感が少年を襲った。  
それでも少年は、気のせいだろうと深くは追求しないことにした。

「あ………ああ、じゃあ、な」

そして少年も、自らの帰路に就いた。

家に着くと、今日もニュースが森の悲惨さを報道している。つい  
に全国区まで広がったか、と呟く少年の類には、笑みのようなもの  
が広がっていた。最初は全否定していた評論家も、科学で証明でき  
ないことをうけ、ついに肯定派に回る始末だ。最初から、もってい  
る好奇心の全てで事件を見守っていた少年には、確かに不快感はあ  
ったが、ざまあみろ、そう呟くと笑顔に表情を委ねた。

その日の夜、少年は眠れなかった。例の事件が気になってしかた  
がないとばかりに、そわそわしている。

(ここからあの森まではそう遠くない。………行ってみるか)

今までは何かと後ろ髪を引っ張られ、森へと足を進められない少  
年だったが、勇気を振り絞り現場へ行くことにしたのである。

少年は簡単に身支度をして、森へと向かった。

家から自転車で十数分、少年は一人森へ着いた。薄暗いのは噂ど  
おりかと森へ入るとすぐになにかの断末魔が耳を貫いた。声のする  
ほうへ急ぐと、少年はひとりの男が鳥を拾い上げるのを見つけた。

背格好はだいたい自分と同じ、深い緑色のローブ。……傍らには、死骸の山。不快な死臭。恐らく鳥だろうが、もはや判種は不可能だった。

思わずハッと声がでる。

(気づかれた……!!)

男はすばやく振り向き、少年を目の端にとらえた。

少年はさっと木々に身を隠すが、男の足音はだんだんと近づいてくる。少年は怖くてただ震えていた。

ついに男は少年との距離4メートル程まで近づくと低く響く声で、「忘れる」とだけ言い、走り去った。

翌朝、少年は例の友人を捕まえ、話しかけた。

「おまえさあ、昨日、つつつか今日の深夜、どこにいた？」

「……どこでもいいだろ」

心底面倒くさそうに友人が答えた。重心の低い声だ。

「森に、いなかった？」

そこまで少年が口にする、友人の雰囲気ガラリと変わった。

「あんな不気味なところに、行く訳ないだろ」

そこまで言い、少年を睨み付ける。

少年は納得しつつも、いまひとつ不信感を払拭できなかった。

日に日に大袈裟になっていく報道に半ば呆れながら、それでも少年は圧倒的な優越感に浸っていた。自分の考えは正しかったのだ、と。

あの評論家も下手なことは言えないとばかりに黙りこくっているが、真相を知らないから、誰も何も言わなかった。

少年は心の奥で、優越の炎に油を注いだ。自分だけが真相に近づいている、自分だけが知ることができるのだ。

日付が変わってから、こっそりと家を出て自転車に跨ると、そのままペダルを漕いでいった。自然とペースがあがり、鼻歌が零れた。森へ着くと、立ち入り禁止の看板を無視して中へと入った。そして昨日と同じ場所へと向かう。とても静かだった。騒がしい原因の鳥がほとんどいないのだから、当然といえば当然なのだが。

少年は鳥の山を見つけると、それに近づいた。ひとつに軽く触れると、前人未到の偉業をした気分を満たされた。

自分は凄いのだ。偉いのだ。勇気ある行動にマスコミは食いつくだろう。そんなことを考える少年を、不意に寒気が襲った。低く響く聞き覚えのある声が背中から聞こえる。

振り向くと、そこには昨日の男がいた。男は力任せに少年を殴ると、首根っこを掴んで軽々と持ち上げた。

「ごめんなさいっ！！ 誰にも言わないから、許して」

苦しそうに叫ぶ少年に、男は冷笑してみせた。

「なぜ此処に来た」

そう問う男に喉を締め付けられゲホゲホと咳をしながら、少年は自身を落ち着かせた。

「お願いっ。離し……」

「なぜかと訊いているんだ」

「離しっ……ごめんなさ……」

少年はすでに冷静さを失っていた。

「お前と話しても無駄そうだな」

男は小さく呟くと、少年の瞳を睨んだ。

少年はしばらく苦しそうにもがいたが、すぐに抵抗はなくなった。

男は動かなくなった死体を乱暴に投げ捨てると、にやりと笑い、切株に座った。

暗く、寒い森だ。空を覗けば絵の具を零したかのように漆黒に染められ、わずかな月の明かりでさえも雲が拒むように流れている。それはまるで、この森の意思のようでもあった。



(後書き)

お読みいただきありがとうございました。  
感想、アドバイス等々遠慮なく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3382r/>

---

死の森-Another Style-

2011年4月2日14時55分発行